

第3回人文・社会科学系研究推進フォーラム

2017年3月3日（金）13:30-18:00

国立大学法人 琉球大学 研究者交流施設・50周年記念館

主催：琉球大学研究推進機構研究企画室、共催：京都大学学術研究支援室、筑波大学 URA 研究戦略推進室／ICR、大阪大学経営企画オフィス URA プロジェクト、早稲田大学研究戦略センター

セッション1「グッドプラクティス事例集作成！：個別プロジェクトのプロセスを共有し、掘り下げよう」

全体ファシリテーター：高橋 そよ（琉球大学研究推進機構研究企画室）

グループファシリテーター：森本 行人（筑波大学 URA 研究戦略推進室）、若松 文貴（京都大学学術研究支援室）、丸山 浩平（早稲田大学研究戦略センター）

丸山 セッション1を担当しました早稲田大学丸山です。実はセッション1は人文社会系の役に立った研究や研究支援に関するグッドプラクティス事例集を作るというゴールを目指して実施しました。そして本日は、皆さんからそのような事例を紹介してもらい、それに対してどんなプロセスが有効かなど、ノウハウについての議論を深め、グッドプラクティスとして抽出していくということでした。ただ、グッドプラクティスとして集約するには、まだもう少し整理が必要なかもしれないという状況なんだと思います。それでも、皆さんから出された事例については、この後、セッション2のほうで少し提案があるかもしれないですけど、ホームページ上で共有していくようなこともあるかもしれません。そこはこれからの話になってくると思います。今回、プレプレアワードのノウハウ、プレアワードのノウハウ、ポストアワードのノウハウという三つに分けて議論し、それを全てまとめた形で発表しようと考えていましたが、少々時間が足りなくなってしまう、まだ三つをすり合わせることは出来ておりません。ここでは、それぞれの担当者から議論した内容をそのままを報告させていただきたいと思いますので、よろしくお願ひします。それでは、プレプレアワードのノウハウについてからご報告をお願いします。

若松 私、プレプレアワードを担当させていただきました京都大学の若松と申します。プレプレといいましても、何を意味するかちょっとよく分からないかと思うんですけども。まずは外部資金を狙うような申請書を書く前の段階でどういうふうな研究体制をつくっていけばいいか。もしくはどういうふうにお金を取りにいくにしても、お金を取りにいく際のどういうふうな交渉をすればいいか。何かその実際の申請書というものの、準備段階の最後のほうになると思うんで、その後、さらに前の段階の段階でどういう形でやっていけばいいかというような話をしました。それで成功例と失敗例、各参加者の人に話していただいたんですけども、一つは琉球大学の石原先生という言語学の研究をされている方がおられまして、その先生の事例を主に中心に話しました。先生が琉球の方言、言語という

ものをいかに保存し、継承していくかというような点について、これまで実践されてきた事例を挙げまして、二つ問題があったらしいんです。一つは各 NPO がそういうことをやっている。NPO が実際の問題に立ち上がる時に、じゃあ、学者としてどう関わっていいか。もしくは点として、それぞれの NPO がやっていくけど、それを線としてつなげるようなことをどうすればいいか。その問題が 1 点。もう一つが専門家が実際に言語の継承、方言の保存、継承をやっていくような専門家自体が少ないと。その専門家のパイを増やすにはどうすればいいかというようなことを、その 2 点に限って、いろんな話をしました。幸い、うちの班には先ほど講演いただいた稲場先生もおられまして、稲場先生のこれまでの経歴などの、これまでの経緯などを聞いて、例えば学会の中に一つグループを作ると。そのグループ専門のオンラインジャーナルの成果媒体をつくっていく。そこからさらに、だんだん社会のほうに発展させていって、あとは NPO をつなげるようなプラットフォームをどんどん、どんどんつくっていく。それをさらに科研費のほうにつなげていくというような話をされていまして。かなりざっくりとした話なんですけど、そういう話をしました。以上です。

丸山 引き続きプレアワードの部分についてご報告いたします。まさに科研費や財団など人文社会系に係る資金獲得の申請段階でどんなことをしたかということディスカッションしました。ただ冒頭、人文社会系の研究者は資金を獲得しても、使い切れなくて繰り越す機会が結構多いというような話があり、そのようなポストアワード的な事例で結構盛り上がってしまいました。必要ないなら申請するなよと言いたいところもありますが、そのような状況でも、事務の方は横串的に多くの事例を見てきていることもあり、いろんな流用の仕方などを知っているの相談するとよい、というような話がありました。この事例のように、我々のグループの一つのポイントは、「人文社会系の研究も様々な人材と繋がることは重要」ということでした。

出てきた事例やアイデアをこちらの図に示しています。左側からプレアワードの流れに沿ってまとめたもので、左側にはプレアワード、右側にはポストアワードの事例も含まれています。プレアワード的な事例としては、研究プロジェクトのネタなどは雑談から得られることも多いので、そのような機会を多くつくと良いという話がありました。例えば、異分野の先生たちと交流することでそこからアイデアをもらえる、URA の方たちと交流することで審査の裏を読めるなど、申請の質的内容が改善でき、採択の確率を高められるという話がありました。さらにポストアワードの取組みかもしれませんが、共著者や共同研究者に入れてもらったり、小さな財団などの研究を一步進めたりすることで、実績や成果を少しずつでも積み重ねていくことで、次の大きなプロジェクト、科研費獲得等に繋がる話がありました。

最後、我々のグループに参加された研究者の先生が議論をうまくまとめてくれました。図書館専門員、URA、事務方、教員など、いろんな方が今回参加していましたが、特に人文

社会系の研究は一人で進める傾向が強く、また事務方など他の人材との壁が高い傾向があるので、ネットワークをつくって議論しながら進めるなど、その垣根を少しでも低くしていくと、もっとうまく進むのではという話でまとめさせて頂きました。以上です。

森本 筑波大学 URA 研究戦略推進室の森本です。私たちのグループはポストアワードについて話し合いました。ポストアワードと言っても範囲が広いので、まず参加者がこれまで行った研究や業務の中で、うまくいかなかったことをグループ内で共有しました。

失敗の考え方ですが、誰にとっての失敗か、内容・展開によっては失敗と思っていてもそうでないこともあり、失敗にも多様性があるという意見がありました。

うまくいかなかったことですが、例えばフィールドワークには、当然様々な調査方法があります。フィールドワーク未経験の人が1人で初めてフィールドワークをする際に、どういうふうやっていいかわからないということがあったそうです。それは先輩からの知識の伝承とかがあったら良かったのに、というお話しでした。これは多分、URAにも言えることで、本部や部局での事例を URA 室内で担保して適材適所に伝えることが肝要であると感じました。それから、コミュニケーション不足の話もありました。例えば、部署内のやり方の違いや、研究分野間での言葉の違いや評価尺度の違いがあります。特に複数人でプロジェクトを担当しているとき、これらのちょっとした違いから、モメることがあったそうです。

次に、高度に専門的でも「観客」がいないため、もったいないことになっているそうで、そこは、隣接する分野の研究者が褒めることで裾野を広げることが良い、という意見もありました。

あとはローカルルールのことについて、意見がでました。これはある側面から見ると、どこかの誰かが失敗をしてしまったから大学独自のローカルルールが増えていくというのだと思います。そのため、失敗をしてない研究者から見ると本当に迷惑な話だと思います。新幹線の駅員さんともめながら、「証拠書類として切符を提出しなければならないので、この切符を持って帰りたいのですが」と駅員さんに掛け合っても「記念乗車はお断りしているんです。改札機をお通り下さい」と言われて困ってしまったこともあったそうです。誤解のないように言うと、駅員さんは仕事をされているだけです。また、海外出張の際には、航空券の半券を提出しないといけないわけですが、スマートフォンや IC カードなどを使って、スマートチェックインできるにもかかわらず、長蛇の列を並んでボーディングパスを受け取らなければならなかったこともあったそうです。

それから、研究者の人が「こんなやりたいです」とある窓口に行ったときに、門前払いされても、後日違う窓口と同じことを相談すると円満解決で終わるという事例もあったそうです。そこは知識量の違いというか、最初の窓口の人は全く悪くないんです。その人は自分の仕事を全うしようと思って、「これは駄目です」と言ってるだけだと思います。「実は、抜け道はありますよ」という、歩く辞典みたいな人に言うといいかもしれないという

お話もありました。プロジェクトをやっていく上では、研究者と事務の方、URA が一体となっていて取り組んでいくことも大変重要だと感じました。

後半は、失敗したらどう乗り越えたらいいのかというのを考えてみました。大変多くの意見がでましたが、時間の関係で1～2つご紹介します。1つは広報です。広報は、研究成果が出たときにだけ使われるものではないですよね。大学から出た研究成果を社会に還元する機能もあります。また、オープンアクセスを用いることで、研究不正防止につながり、研究の健全化が進むという意見もありました。社会に認められることで、また新しいプロジェクトが開始できるという好循環が生まれるのではないかとということでまとめました。以上です。

(口頭報告を書き起こし・再編集しました。)

編集責任：丸山 浩平（早稲田大学研究戦略センター）、若松 文貴（京都大学学術研究支援室）、森本 行人（筑波大学 URA 研究戦略推進室）、高橋そよ（琉球大学研究推進機構研究企画室）